マルコによる福音書における物語時間の分析

焼山　満里子

問題の所在

マルコによる福音書を事実世界から独立した自律的世界を構成する文学テキスト、物語として読む試みは、最近の福音書研究では珍しくない。[1] あえてマルコによる福音書が文学テキストであることを主張する理由は重要である。それは福音書から直接、歴史的な事実の証言を求めるのではなく、まずは福音書が構成する虚構世界に注目することによって、福音書をより著者の意図にそって理解することができるのではないかと考えるからである。本論文でもマルコによる福音書を文学テキストとして読み進めたい。実は福音書が多くの資料をつなぎあわせた結果として成り立っているとしても、結果として私たちの目の前にある福音書がそれ自身一貫性のある虚構世界を構成していると想定する。そのような前提はつまり、個々の諸資料は、著者によって新たに現在の形に配列されたと考える。本論文では物語論の方法によって諸資料が配列され、完成された福音書の現在の形に注目する。それによって福音書が歴史的事実の資料として用いられる前に、テキストそのものに注目し、福音書全体の主張に近づくことができると考える。[2] 物語論的にマルコを物語として扱うということは、マルコ福音書がその言語表現によって、事実世界とは独立した概念的世界、言い替えると虚構世界について言及していることを認めるということである。物語を事実世界から独立した自律的世界を構成する文学テキストとして扱う目的は、事実世界との混同を避けるという意味がある。文学テキストは直接的に事実世界に言及しているのではない。した

がって物語が言及する世界が事実であると解釈したり、物語に直接的に歴史的実証的価値を求めることは、物語の世界からの自律性を損なうことになる。それは言及的誤謬といわれる。[3] 物語論による福音書の解釈は、言及的誤謬を避け、あくまで物語を物語内で理解しようとする試みである。

物語論による分析

物語論によるマルコ福音書の有効な分析方法の一つはプロット手法の分析によるものである。[4] 物語世界は物語の中で描写され、言及されるすべての出来事によって成り立っている。出来事はある一貫した連続性を目指して配列されている。プロット手法とは、物語の構成要素である個々の出来事が選択され、配列され、完成された物語として語られる方法を意味している。プロット分析は物語の中で個々の出来事がどのように配列されているかを分析することになる。

物語はナレーターによって語られる。ナレーターとは語りの地の文に表れている、登場人物の相互行為の物語を語る語り手である。テキストの表面に表れているのは、実際の著者ではなくナレーターであるから、プロット分析はナレーターの物語の手法を分析することになる。物語論的解釈の目標は、ナレーターの文学的工夫を全て読み取る理想的読者として、物語を理解することである。[5] ナレーターは個々の出来事を選択し、結合することで配列した物語を語っている。物語の構成要素である個々の出来事を物語から取り出して、それぞれの時間的前後関係によって並べ替えたものを物語世界と考える。物語世界は個々の出来事の時間、空間、登場人物の総合としてのみ考えられる概念的自律世界である。プロット分析は出来事が配列されて完成した物語と物語世界を比較することによって可能になる。物語の配列された時間と物語世界とが相違する点は個々の出来事が時間的前後関係通りに並べられてはいないということである。物語から物語世界を抽出し、配列された物語と比較すれば、ナレーターのプロット手法が明らかになる。

物語における出来事の配列の仕方には、作品の意図が示されている。[6] プロット手法の重要なものは未来の出来事を予告する前方への言及と過去の事件を再び言及する後方への言及である。

過去の出来事への言及とは次のようなことである。物語のナレーターはある事件は他の事件が原因で起きたと解説する。イエスが湖の上を歩く物語（六・四五―

五二）では、弟子たちは湖上を歩くイエスを恐れ、何が起こっているか理解できない。ナレーターは、それは弟子たちがパンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。（六・五二）と説明する。この説明によって読者は湖上を歩く物語とこの物語の前に語られた五千人に食べ物を与える奇跡（六・三〇―四四）を関連づけて読むべきことを学ぶ。この様にナレーターが過去の出来事について言及するのは、前に言及した出来事を新しい情報によって理解し直して欲しいからである。プロット手法の分析はこのように、ナレーターが物語世界の時間を自由に行き来し、読者を物語の中心的テーマへと導く手法を分析する。

以上で物語論の中で、マルコの文学的手法の一つであるプロット分析の方法を述べた。以下で実際にマルコ福音書におけるプロット手法を分析してみよう。

マルコ福音書における配列された時間

以上のような物語論の視点によると福音書は内容的に大きく五つに分けられる。[7] 第一に一章一節から一五節は福音書全体の導入部分となっている。ここで読者は物語を解釈する視点を与えられる。まず物語時間の始めと終わりが示されている。物語時間のはじまりは、一章二節におけるイザヤ（実際にはマラキ）が預言する時である。一章一節から一五節の間にこのイザヤの預言を含め、三つの予告がなされ、二つまでが成就する。つまりイザヤの予告に従って、洗礼者ヨハネが登場し、活動する（四節以下）。このヨハネも予告する（七節）。今度はヨハネの予告に従ってイエスが登場する（九節以下）。イエスは「時は満ち、神の国は近づいた」と言う（一五節）。ここで示される物語時間の終りは、近づいたと言われている神の国の到来である。このように物語時間のはじめと終わりが示され、その物語時間の中で出来事が配列されている。

物語に未来への言及、予告があった場合、後に配列された出来事として成就される。あるいは予告があって、物語が終了するまでには実現しないものがいくつかある。多くの予告が成就されるので、物語の中で成就されない予告は読者に予告の成就という期待を抱かせる。一章一節から一五節の間では、イザヤ、ヨハネによって語られた予告が成就した。このことによって読者はイエスによって語られた、神の国の到来という予告もいずれ成就するに違いないという期待を抱く。

しかし続く一章一六節から八章二六節では神の国の到来は成就しない。神の国については、保留のまま新

しい予告もなく、一連の出来事の報告が続く。この段落のテーマはイエスは誰か、ということをめぐってのようである。というのは一章一六節から三章二〇節の間に度々悪霊に取りつかれた人の癒しが報告される（一・二一－二八、三四、三九、三・一一－一二、一五、一・四〇－四五も参照）。しかしイエスは悪霊が「神の聖者」であり「神の子」であることを「悪霊がイエスを知っていた」にも関わらず、言わないように命ずる（一・二五、三四、三・一一－一二）。悪霊が沈黙することで他の者たちがイエスが誰であるか、理解できない。

六章五二節、八章一七節では弟子たちがイエスを理解できないことが言われている。各々の場合、読者はそれ以前に配列された出来事を振り返るように要求される。報告される出来事の前の出来事への言及は読者が物語を読むのを遅らせ、古い事柄について新しい情報をもって立ち止まり、振り返り、理解し直すことを勧める。八章一七節で弟子がイエスを理解できないのは、一九節で指示されているように「五千人に五つのパンを裂いたとき（六・三〇－四四）」のことが理解できないからである。六章四五から五二節で弟子たちがイエスを理解できないのは、五二節で指示されているように、「パンの出来事（六・三〇－四四）」を理解できなかったからである。ここからさらに読者はさかのぼって、弟子たちは神の国の秘密が打ち明けられている（四・一一）にも関わらず弟子たちすらイエスが誰であるかを知ることができないことを知る。四章一節から八章二六節の出来事の配列は、その秘密が何であれ、弟子たちが秘密を明かされているにも関わらず、他の者たちと同じようにイエスを理解できないことを語っている。そしてイエスが弟子たちの無理解に驚くことでクライマックスに達する。

八章二七節から一〇章五二節の第三番目の段落はイエスが弟子たちに自分が誰であるかたずねることではじまる。弟子たちの関心はイエスが誰であるかに向けられる。弟子たちは「あなたは、メシアです」と答える（八・二九）。しかしイエスは自分のことを誰にも言ってはならないと戒める（八・三〇）。これはペトロがイエスの受難・死・復活予告を理解していないことを示している。ペトロは人間的な期待をもってイエスがキリストであると考えているので、イエスの受難予告を受け入れることができない。そのペトロをイエスは「サタン」「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（八・三三）という厳しい言

葉で叱っている。

一回目の受難・死・復活予告に続いて九章二節以下で語られるイエスの変容物語は、元来復活物語であったことは、広く認められている。[10] ナレーターが復活物語をイエスの生前の出来事として配列している。それはイエスの受難・死・復活予告を保証するためであると考えられる。[11] 神が「これはわたしの愛する子。これに聞け。」と言うことでイエスの受難・死・復活はイエスと神の意志であることが示される。イエスの受難・死・復活予告は信じるべきことであるとペトロ、ヤコブ、ヨハネはイエスの変容と神の声を聞くことで教えられる。しかしペトロはどう言えばよいかわからず、他の二人も恐れているだけである。つまりイエスの受難・死・復活予告によって明かにされるイエスのメシア性は、特別な知識を与えられている弟子たち、特にペトロにも理解されないのである。

第一回の受難・死・復活予告は、変容物語によっても理解されるに至らなかったことは、第二回の受難・死・復活予告を弟子たちが理解できなかったことによって、明らかになる。第二回の受難・死・復活予告を弟子たちは理解しなかったが、恐くて尋ねることができない（九・三二）のである。

三回目の受難・死・復活予告も弟子たちは理解していない。それはヤコブとヨハネがイエスに的外れな願いをすることによって明らかになる（一〇・三五以下）。イエスはヤコブとヨハネに自己中心的な願いを申し出る。[12] イエスはヤコブとヨハネがイエスがキリストであると言うことを理解せず、人間的な栄光を求めていると言う。イエスがキリストであると言うことの意味は、およそ救い主キリストには似つかわしくない、受難し、死にそののち復活するというキリストなのである。弟子たちはイエスの語るキリストの意味を理解していないことが、三回にわたって繰返し述べられる。しかも三回の予告は全く同じではない。予告は三回の繰返しにおいて、少しずつ拡大されていく。読者は予告が少しずつ拡大されていくことで、イエスの受難・死・復活について理解を深め、成就を確信していくのである。

このようにイエスの受難・死・復活予告が弟子たちには理解されていないことが、繰返し述べられた後に、イエスがダビデの子、と呼びかけられる出来事が配列されているのは、注目すべきである（一〇・四六－五二）。イエスはダビデの子と呼びかけるバルティマイの信仰を誉めている。つまりこの出来事は、読者に、

弟子たちにはイエスがキリストであるという意味が理解されない一方で、弟子たちの無理解とは関係なくイエスはダビデの子、キリストであることを確認している。

続く一一章一節から一三章三七節ではイエスと弟子たちがエルサレムに到着することで物語の新しい段階がはじまる。イエスの最後の日々が緊張感をもってはじまる。

最後に一四章一節から一六章八節では八章二七節から一〇章五二節で語られた三組の受難と死の予告が成就する。それと同時に弟子たちの無理解がクライマックスに達する。弟子たちがイエスを見捨てて逃亡するのである。弟子たちの逃亡についても予告と成就のプロット手法で語られる。一四章二七節で弟子達が散らされることが予告され一四章五〇節で成就する。続いて語られる、ペトロがイエスを否認する予告は詳細にわたる。ペトロが「今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度」イエスを知らないというと予告されている（一四・三〇）。この予告も詳細に成就する（一四・六六―七二）。ユダの裏切りは一四章一七節から二一節で予告されこれも成就する（一四・四四以下）。先にイエスがキリストであるという理解に神的な理解の仕方と人間的な理解の仕方の対立が指摘されたように、ここでも弟子に関する一連の予告と成就において神のことと人間のことの対立がある。常に予告はイエスの言葉と弟子たちの言葉の相違を明確にし、しかも予告の成就によってイエスの意志が弟子たちの意志に優位することが示されるのである。ペトロはイエスを否認することを予告されるが、「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と答える。また弟子たちもイエスを見捨てることはないという（一四・三一）。しかし弟子の逃亡、ペトロの否認、ユダの裏切りは、人間の言葉とは関係なくイエスの言葉通りになるのである。このことによってなおさら残された予告、イエスの復活の成就が期待される。配列された時間が終わった後、語られていない物語時間の中で予告が成就されるに違いないという期待感をもって読者は福音書を読み終えるのである。

このようにマルコにおける出来事の配列を概観し、プロット手法の分析を行うと福音書の出来事は予告と成就という組み合わせで配列されていることがわかる。しかしこのプロット手法にあてはまらない記述があることに気づかされる。出来事がナレーターの意図によっ

て配列されていることで福音書が構成されているにも関わらず、出来事の記述ではない箇所があるのである。このような配列された出来事から構成される物語の世界を逸脱する記述はどのように理解したらよいのだろうか。

マルコ福音書におけるまとめの句

福音書にはまとめの句と呼ばれている所が三箇所ある。一章三二節から三九節まで、三章七節から一二節、六章五三節から五六節までである。これらのまとめの句は伝承史研究においてマルコの著者の手によるものというのが一般に受け入れられている意見である。[13] したがって最もマルコ的な箇所でありながら、マルコの物語論的な手法にあてはまらない箇所なのである。これらはプロット手法による配列された時間の中にありながら他の出来事と異なり具体的な特定の時間を示すのではなく、ある幅のある時間を指示している。短い物語の時間の中で反復的・持続的な語り方で出来事がまとめて報告され、一つ一つの具体的な出来事の報告より多くの時間、より広い場所でイエスが活動したこととして語られる。このような箇所はどのように理解したらよいのだろうか。

大貫隆氏もこの箇所を福音書理解のために重要視している。[14] 大貫氏がこのまとめの句が他のマルコの文体と異なっていることに注意を払っていることは本論文の立場と同じである。氏はまとめの句と呼ばれる箇所では動詞の時称に未完了過去形が多く使われることに注目する。[15] 動詞の未完了過去時称は過去における反復的・持続的行為を表す。未完了過去形による要約によって、具体的出来事を記述するよりも少ない「物語る時間」で一定の期間にわたって継続・反復される「物語られた時間」を語ることができる。

これらは内容的には例証効果をもたらす。[16] 大貫氏は六章三節から三六節におけるまとめの句はある出来事が繰り返し起こったことの例として言われていることを指摘する。「すぐに人々はイエスと知って、その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、…病人を床に乗せて運び始めた」というのは、ゲネサレトに限らずどこでも繰り返しおこったことの例として述べられていると言う。

また一章四〇節から四五節において病人の癒しが語られるがそれは直前の一章三九節におけるまとめの具体例として提供されている。特に病人の癒しには時間と場所の設定がない。他の類似の話には時と場所の設

定があるにも関わらず、（例えば一章二一から二七節、二章一節から一二節、三章一節から五節、五章一節から二〇節、二一節から二四節、三五節から四二節、五章二五節から三四節、七章三一から三七節、八章二二節から二六節、九章一四節から二九節、一〇章四六節から五二節）ここで時間と場所の設定がないだけにより効果的に例証効果を発揮する。

しかし三つのまとめの句のうち一章と三章は六章におけるまとめの句と違う性格をもっていることも指摘しなくてはならない。それは二つの要約的報告には沈黙命令が含まれているということである。一章三四節と三章一一節から一二節では悪霊は奇跡を行うイエスを神の子と理解する。しかしイエスは悪霊に沈黙を命じている。読者はなぜイエスを神の子と理解している悪霊がイエスのことを口外しないように沈黙を命じられるのか、疑問に思い立ち止まり、これまで語られた物語を振り返る。イエスは聖霊の助けによって悪霊を追い出す（三・二九－三〇）。悪霊追放は頻繁に言及される（一・二一－二八、三四、四〇－四五、三・一一－一二、一五）。三章二〇節以下では悪霊追放者としてのイエスの活動の背後にある力について説明される。そして読者はどこか前の箇所でサタンが縛られたこと、聖霊への言及があったことを思い起こす。いつサタンが縛られたのか。そして読者は一章一二から一三節の出来事を思い起こす。イエスは荒野でサタンの誘惑を受けている。三章二七節が語っているように悪霊はサタンが縛られたあとにのみ追放され、イエスは誘惑を受けた後ずっと悪霊を追放し続けている（一・二一－二八）。読者はイエスが宣教と悪霊追放のために誘惑に打ち勝ったことを考えあわせ、物語内部では一章一二から一三節における荒野での誘惑の出来事はサタンが縛られた出来事でもあったという結論に達する。[17]

ここでまとめの句は読者が物語を先に読みすすむのではなく、立ち止まり、もう一度これまでの出来事を考え直すことを要求している。それによって読者はまとめの句の前にあった出来事をさかのぼって考え、一章で語られた荒野の誘惑の意味を新しい情報の下で理解し直し、また沈黙命令の理由を考えるのである。悪霊はイエスが「神の聖者」であり「神の子」であることを知っている。このイエス理解は必ずしも誤っていない。しかしイエスは言わないように命ずる。悪霊が沈黙することで弟子たちを含め、人々はイエスが誰であるか理解できない。読者は弟子たちが正しいイエス

理解を妨げられていることを知る。先に議論したように四章以下では弟子たちの無理解というテーマが始まる。悪霊への沈黙命令というテーマは弟子たちの無理解というテーマに引き継がれる。その結果読者は弟子たちが正しいイエス理解をしておらず、今の弟子たちのイエス理解はイエスによって問い直されていることに気づかされるのである。そして弟子たちのイエス理解の訂正はとりもなおさず、読者自身のイエス理解をも訂正しているのである。

結語

このようにマルコの物語時間に注目して分析してみるとマルコ福音書のテーマが浮かび上がってくる。福音書は終始、読者がイエスは誰なのか、どのような意味でキリストなのか考え、これまでもっていたイエスについての理解を見直すことを勧めていることがわかる。[18] そのためにマルコはプロット手法を用い、時にはプロット手法を逸脱するまとめの句を語る。そして内容的には、悪霊への沈黙命令、弟子たちの無理解という仕掛けによって読者を新たなイエス理解へと導いてゆくのである。

1 例えば、Donald Juel, *Messiah and Temple*, Missoula, Montana: Scholars Press, 1977, Norman R. Petersen *Literary Criticism for New Testament Critic*, Philadelphia: Fortress Press, 1978,(邦訳、ノーマン・ピーターセン、『新約学と文学批評』宇都宮秀和訳、東京：教文館、一九八六)、最近のものとしては、大貫隆『福音書と伝記文学』東京：岩波書店、一九九六年など。

2 物語論については、Gérard Genette, "Discours durécit, essai de méthode", in *Figures III*, Seuil, 1972, 邦訳、ジェラール・ジュネット、花輪光他訳、『物語のディスクール』東京：水声社、一九八五年に詳しい。

3 ピーターセン、『新約学と文学批評』三二―七一頁。

4 ピーターセン、『新約学と文学批評』七二―一三二頁。

5 理想的読者を物語論の用語では物語に内包された読者と言う。本論文では議論が煩雑になるのをさけるため以下すべて読者と記述してあるところは、この物語に内包された読者の意味である。

6 Norman R. Petersen, "'Point of View' in Mark's Narrative." *Semeia* Vol. 12, 1978, 108; D. Rhoads, and D. Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel*, Philadelphia: Fortress, 1982, pp. 73−77.

7 ピーターセン、『新約学と文学批評』同上。

8 D. E. Nineham, *Saint Mark*, London; Pelican

Books, 1963, p.225; 大貫隆「福音書の『要約的報告』とは何か」『福音と世界』一九九三年十月号、二七－三七頁。

9 Nils A. Dahl, "The Purpose of Mark's Gospel." in *Jesus in the Memory of the Early Church*, Minnesota: Augsburg Publishing House, 1976, pp.52-65.

10 Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der Synoptischen Tradition*, Göttingen, 1950（邦訳、ルドルフ・ブルトマン、加山宏路訳、『共観福音書伝承史Ⅱ』東京：新教出版社、一九八七）九六－一〇一頁。

11 ブルトマン、前掲書、九六頁。Andrew T. Lincoln, "The Promise and the Failure: Mark 16;7,8" *JBL* 108／2(1989)pp.294-296.

12 Nineham によれば、受難予告とヤコブ、ヨハネの自己推薦の物語は本来一緒に語られるものではなかった(Nineham, ibid. pp.278-279)。ここでも二つの出来事はナレーターによって配列されていると言える。

13 田川建三『マルコ福音書 上巻』東京：新教出版社、一九七二年、二〇〇－二〇一頁。大貫隆『福音書と伝記文学』三－二七頁。

14 大貫隆、前掲書、一八頁。氏はまとめの句を要約的報告と訳している。本論文ではまとめの句という従来の訳語を採用した。まとめの句と訳すのは田川建三、前掲書である。また大貫氏はこれらの箇所は本文内在的ではなく、本文を越えて著者と読者の間で交わされるコミュニケーションであるとする。大貫氏と本論文の立場が相違する点は、本論文では物語論の立場からまとめの句をあくまで本文内在的に考える事ができるとする点である。加えて大貫氏と本論文とでは著者、読書の捉え方も相違している点に注意しなくてはならない。

15 大貫隆、前掲書、三三－三八頁。

16 大貫隆、前掲書、五一－五八頁。

17 ピーターセン、前掲書。

18 大貫隆、前掲書、五九－六九頁。